

講演題目

近代東アジアの海藻文化 ～志摩漁村から描くグローバルヒストリー～

講師

三重大学人文学部教授 塚本 明

講演要旨

海女漁が盛んな志摩地方は、古くから海藻文化の中心地でもある。19世紀以降には海藻漁の比重が飛躍的に高まり、村の生産額の8割を占めることすらあった。志摩の海女は海藻を求めて日本列島各地へ出稼ぎに赴き、さらに朝鮮海へと出漁する。それが刺激となり済州島の海女が朝鮮半島東南岸に進出・定着するなど、海女文化の地域的拡大をもたらした。背景のひとつは中国における寒天消費の急増で、原料のテングサの需要が急速に高まったことである。自家消費や肥料利用程度に止まっていたものが国際的な商品価値を持つことにより、江戸幕府、また明治政府にとって寒天は重要な輸出品となった。日本・韓国・中国の商人と加工業者らが関与する流通構造が成立し、フノリやアラメ、北方のコンブ等も含む流通の飛躍的な拡大は、生産を刺激するだけでなく海藻の新たな消費を生み出した。寒天が細菌培養土となり、アラメを加工してヨードを生産するなどの工業的な活用も進み、海藻は様々な形で西洋へも輸出されていく。海藻の多様な価値、海女の出稼ぎ、海藻漁におけるcommons意識と男女の協働形態、海と食文化など、多様な観点から海藻文化史の魅力を語りたい。



プロフィール

専門は、江戸時代の民衆社会史。京都大学人文科学研究所助手などを経て現職。熊野や志摩、伊勢地域で、学生や市民らと共に古文書の調査と整理作業を行いつつ、地域の個性的な歴史の発掘と発信に努めている。近著に『鳥羽・志摩の海女－素潜り漁の歴史と現在』、『江戸時代の熊野街道と旅人たち』ほか。

講演題目

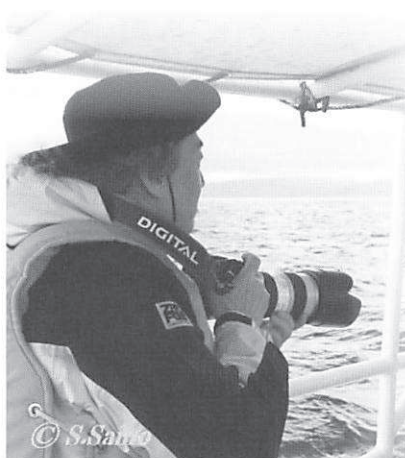
鯨類の生態の謎を解き明かす ～伊勢湾と熊野灘の多様なクジラとイルカの物語～

講師

三重大学大学院生物資源学研究科教授 吉岡 基

講演要旨

近年、新種の記載も続いているが、世界には約90種の鯨類が生息している。このうち約半数は、日本沿岸にもその分布が知られており、一部は鯨類漁業の対象となっているほか、ホエールウォッチングやスイムプログラムなどの観光産業においても重要な海洋生物資源として利用されている。日本列島の中央に位置する紀伊半島東岸にあって、南北に長い三重県が面している海岸線は、内湾の伊勢湾と黒潮洗う熊野灘（太平洋）に面しており、そこには約20種、すなわち世界の鯨類の約1 / 4にあたる種が生息・来遊している。そのうちの1種、スナメリは一生を湾内で過ごす体長2メートルほどの小さなハクジラ類であり、この海を代表する鯨類である。これに対し、熊野灘には外洋性で体長18メートルにもなる最大のハクジラ類であるマッコウクジラが季節的に来遊し、ホエールウォッチングの主要な対象種になっている。本講演では、これら2種および熊野灘に来遊するその他の鯨類について、これまでの調査・研究の成果を紹介する。



プロフィール

専門は、鯨類学、海生哺乳動物学、繁殖生理学。三重大学理事・副学長（研究・情報担当）、三重大学副学長（研究担当）を歴任し、現在、三重大学大学院生物資源学研究科附属鯨類研究センター長。水族館で飼育されている鯨類の繁殖生理学に関する基礎的な研究を進め、水族館との共同で国内初の人工授精によるハンドウイルカの出産に成功（日本動物園水族館協会古賀賞受賞）。全国の水族館との研究を継続するとともに、野生鯨類の生態研究にも広く取り組む。